

いぶき16号平成24年5月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第15回：イザベラ・バード（1831～1904年）

「私は日本の子どもたちがとても好きだ。私は今まで赤ん坊の泣くのを聞いたことがなく、子どもがうるさかったり、言うことをきかなかったりするのを見たことがない。日本では孝行が何ものにも優先する美德である。何も文句を言わずに従うことが何世紀にもわたる習慣となっている。英国の母親たちが、子どもを脅したり、手練手管を使って騙したりして、いやいやながら服従させるような光景は、日本には見られない。

私は、子どもたちが自分たちだけで面白く遊べるように、うまく仕込まれているのに感心する。家庭教育の一つは、いろいろな遊戯の規則を覚えることである。規則は絶対であり、疑問が出たときには、口論して遊戯を中止するのではなく、年長の子の命令で問題を解決する。子どもたちは自分たちだけで遊び、いつも大人の手を借りるようなことはない。」

（出典『日本奥地紀行』平凡社）

イギリスの女性旅行家で紀行作家のバードは明治 11 年（1878 年）に東北地方や北海道、関西などを旅行し、その旅行記“Unbeaten Tracks in Japan”（邦題『日本奥地紀行』）を執筆しました。日本の地方の住居、服装、風俗、自然などが詳細に書き留めてあり、明治維新当時の日本の情勢を知ることのできる貴重な資料となっています。バードは「ヨーロッパの多くの国々や、わがイギリスでも地方によっては、外国の服装をした女性の一人旅は、実際の危害を受けるまではゆかなくとも、無礼や侮辱の仕打ちにあったり、お金をゆすりとられるのであるが、ここ（日本）で私は、一度も失礼な目にあったこともなければ、真に過大な料金をとられた例もない。群衆にとり囲まれても、失礼なことをされることはない。（中略） 彼らはお互いに親切であり、礼儀正しい。それは見ていてもたいへん気持ちがいい」と日本人を絶賛し、米沢平野の光景を「鋤で耕したというより鉛筆で描いたように美しい。まったくエデンの園である」と記しています。

（M.I.）